

笹物語

権現岩(冠岩)

中番にあり、権現様をお祭りしている。頂山の六部分者(日光院)が弟子とともにここを通りかかり、弟子の法力試みに岩を割ってみよ、と言いつけた。弟子は錫杖で岩を打った瞬間に火煙が上がったが割れなかった。次に日光院が錫杖を振り上げると大岩はあまじい音をたてて二つに割れ、半分は下に転げ落ち、残った方が今の権現岩となっている。

公会堂の跡から迫力ある岩が見える。

昔は祖谷にある国有林も木材は産出していた。谷道に製材事業所があり、人も多く暮らしていた。食料品などは徳島方面から入っていたが、酒だけは高知の酒が必要で、若い者が四里半(約18km)を山道を越えて明賀の店屋まで買い出しに来ていた。酒は酒入用の水枕に入れてもういっタタい時は一斗五升もの酒を背負って山道をみえながら、ことごと一日がかりで運んでいたという。(権山のぞり)

大規模な平国国有林。物部は林業、養蚕、炭焼き、猪三極が主要産業であり、棚田、畑で半分は米や穀物、野菜を作っていた。しかし燃料革命により炭が、林業輸入自由化で林業が圧迫され和紙から洋紙への製紙工業が変わること、一気に山で生活することが難しくなり、仕事を求めて次々と山を下り、人の住まない集落があらわれるようになった。

山から人がなくなるといことは山で育った文化とか、風習とか伝承が失われて知恵や技術、屋号はもう30年、地名などもとていつかなくなってしまうという瀬戸際。

志瀬 山中にある石垣群におどろいた。何段にも石を積み、田畑を石で囲った家の跡が何軒もあった。物部では昭和30年代の高度経済成長に逆行するように、山から平地へ人が下りて行った。山を下りる時、子や孫のためにと植えたスギ林におおわれて、下から見上げて人の営みの跡さへ見ることができない。残された家の軒下に昭和34年の木材新聞がそのままあった。この年からここでは層をめくる人が居なくなり、時が止まっている。

石垣を積んだ段々畑ではカライモが生産されていた。カライモは焼酎の原料になり、各家では密造酒が作られていた。行政は「収税」という人を派遣して取り締まりを行なったが、収税が来るとい情報は瞬く間に広がり、山や谷などの隠れ場所に酒を隠した。取り締まる側の巡査も村人に酒をもらって飲んでいたのでほとんど効果はなかったようだ。米の生産量の少ない山間地域ではどぶろくを作る家はあまりなかった。(新・権山産生風土記より)

物部村史によると、笹村は村の北にそびえる山(矢筈山)をササハゲといい、全山に木が生えず笹のみであるので村名を「笹」というようになり、篠の字を用いたこともめると記されている。笹は昭和のはじめまで高知~徳島間の往来が多く、徳島から来る人は煙草を背負って来て、物部のカライモで作る焼酎と交換した。明賀には木賃宿が二軒あり、そこで泊まり各地を巡った。笹の昔賑わった夏祭りには祖谷や豊永からも参拝者で大いににぎわい、夜を徹して踊り明かし若者の交流の場となっていた。

ナナハツイ

安徳天皇が阿波から笹ハゲを越えてこの地で泊まった岩屋を大岩といひ、ナナハツイへ分かれた。そこで七つのカマを一つに飯を炊いたとされる。その後、一ノ瀬(吉瀬)へソトビレクルミサユ〜大野〜大谷口を経て高板山においでになったという。

笹の谷川は、透明度が高く澄みわたる清流。

炭火焼きは各地で行われていて炭が腐っている。炭を焼く人は山から上りてきて、でこ上から炭を山主と分けた。作り分けは1:1、作り分けは2:8の4:6の7:2の契約は1年更新で行なれた。

里道の両側に石垣が段々に積み上げる。

葦畠

葦畠下

葦畠前

葦畠

葦畠

葦畠

葦畠

葦畠

葦畠

葦畠

葦畠

葦畠

葦畠

葦畠

葦畠

葦畠

葦畠

葦畠

葦畠

葦畠

葦畠

葦畠

葦畠

葦畠

葦畠

葦畠

葦畠

葦畠

葦畠

葦畠

葦畠

葦畠

人の子で一つずつの石を積み上げていた。笹に住む人祖はどんな思いで積んでいたのだろうか。

高板山への祈りの道であり、祖谷へ続く塩の道でもある。

土居番の石垣は一際大きく立派に見える。関所跡には倉の建物が残っている。観音堂の本尊は正観音。不動尊と聖母門天が脇立。(元禄13年(1700)建立)

境の松

境の松

境の松

境の松

境の松

境の松

境の松

境の松

境の松

境の松

境の松

境の松

境の松

境の松

境の松

笹の中心地、本村にあたる土居番には関所があり、柳瀬次郎太郎という人がその役を務め、寛永6年(1629)本番所となり、その後、西屋姓と改めて明治4年(1871)の廃止まで続いた。よさこい節の紙信、お馬はこの道を阿波へ落ちのびていたと伝わる。

昭和39年に林業の輸入自由化が始まり、45年頃から木材の価格は下がり続け林業は急激に衰えていった。山で採り所に暮らしていた昭和30年代、一の瀬に残っていた木材新聞を讀んで山を研究し、林業を生業として生きていた人たちのことを思う。

山で暮らす人々は長いことかたて、山で生きる知恵と技術と身につけてきた。みんなが山を下り、それらを伝えることもなくなった。これから先、人は山で生きていくことができないようになる。

大板から亀ヶ峠を経て笹を越えて人も物も移動した。中でも赤岡で作る真塩はにがりがない、醤油の醸造や食料などに使われ、瀬戸内海の差塩はにがりを含み、漬物用や魚の貯蔵用に使われた。塩の用途の違いから赤岡の真塩と瀬戸内の差塩がこの道を通り、境を越えて運ばれていた。

塩買切手、持ち物。車社会になり、世紀足らず、人の背で足で荷物を運ぶ人も減らされていった。

五王堂 横山、奥村、高橋、田中、笹田、五つの家それぞれに八幡様を祭るお宮があることに由来する。権山で、権山で、権山で。

黒代 岡村越前が初めてこの地に来た時に槍の柄に、龍魚(黒い魚)(ワグイ)をかけた。来たのを安丸城主がみて、くろが、と叫んだことが村名になったと伝わる。東番、中番、官番、官西の集落がある。上葦生ハナハナ所聖場(明治元年奉勧請)や安大師、阿弥、他堂がある。棚田が広がるのどかな景観がとていい。